

藍ちゃんのも

家族そろって

およいでる

強そうな黒のお父さん、鮮やかな赤色のお母さん、青空のような元気な青色のお兄ちゃん。そこに今年、かわいらしいピンク色の妹が加わった。それは1年前のある「事件」がきっかけだった。

熊本県山鹿市鹿本町の木村眞一さん(65)、千代さん(63)夫妻の自宅。昨年「こどもの日」の前、4歳になる近くに住む孫の千昭君のためにこいのぼりを準備していた。

「藍ちゃんのは?」。お父さんとお母さん、お兄ちゃんのこいのぼりを揚げた時、千昭君と一緒に作業を手伝っていた1歳の妹の藍子ちゃんがそう言って大泣きした。そこに自分のがないことに気がついたのだ。

少し前に片付けたばかりだったひな人形の話をしてなだめようとしたが、全然わかってもらえない。泣きやまない藍子ちゃんに、千代さんは「切ない気持ちになっただ」という。

そこで今年新たに準備したのが、藍子ちゃんの好きなピンク色のこいのぼり。「女兒鯉」「我が家は女の子もいます」の声から作

私のは? …泣いた翌年、祖父母の贈り物

りました」。今年2月ごろ、眞一さんが地元の特約店・ベビー屋(熊本県菊池市)のチラシに目をとめ、夫婦で買ってきたものだ。

男児の健やかな成長を願う端午の節句に、鯉にちなんだ飾り物をするようになったのは江戸時代中期とされる。こいのぼりに女の子用という発想はもともとない。木村さん夫妻には全部で6人の孫がいるが、女の子は藍子ちゃん一人だけ。千代さんも「去年までは女の子にこいのぼりなんて思いもしなかった」という。

ただ、ベビー屋の富田律代さん(60)によると、長男の初節句にこいのぼりを買った後、次の子どもが生まれると、買い足して一緒に飾る人は以前からいた。そうした買い手を想定した緑やピンク、オレンジなど様々な色の商品もあった。

そんななかで富田さんは5年ほ



家族4人がそろったこいのぼり＝山鹿市鹿本町

ど前から、ピンク色のこいのぼりを「女兒鯉」としてPRを始めた。「ジェンダーの平等の話が出る世の中になってきたし、男の子の日ではなくて『こどもの日』というくらいだから」。最近の女の子用のこいのぼりを買うに来る人も珍しくはないという。

そして迎える今年「こどもの日」。4月11日、木村さん夫妻が去年と同じように孫たちに手伝ってもらいながらこいのぼりを揚げた。最初にうれしそうに声を上げたのは千昭君だった。「藍ちゃんこいのぼりも泳いでる!」。藍子ちゃんも「お兄ちゃんのそばで泳いでる」とはしゃいだ。

週に3日ほどは木村さん夫妻の家に行ってくる仲良しきようだし。けんかになることもあるけれど、最近はいつも2人で庭に出て、こいのぼりをながめているという。

(島田耕作)